
ぶりーちがくぱろ しょーとしょーと

Melody

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぶりーちがくぱろ　しょーとしょーと

【Nコード】

N6187W

【作者名】

M e l o d y

【あらすじ】

短編小説を連載していこうとおもってます。

作者の趣味と気分により各話のテイストがかなり変わるとおもいます。

まえおき

この作品は名前の通り
ブリーチの学パロの小説を書いてみよー！
というものです。

学パロいいですよね学パロ。
大好きですよ学パロ。

季節とかはあんま気にしません。
というか気をつけられるほどの能力をもってないです。
短編集確定ですねw
気のむいたときに更新します

文才ないのですが、連載の中で矛盾することがないようにします。
できれば伏線とかはりたいです。

まあ簡単なものしかひけません(´へ´;))

もしかしたら小豆さんとコラボとかあるかも…です！
色んな人とできるようになったら楽しそうですね。

まえおき (後書き)

200文字つめるの大変でした(笑)
前置きですからww

しぎょうしき

「ひつつがっやくんっおはよう!」

「…雛森か。はよ」

高2の始業式。

俺に駆け寄ってきた雛森は、俺の幼馴染。

俺は雛森が好きだ。小さいころから…ずっと。

「クラス発表の紙、みた？」

「ああ。あそこで配ってるぞ」

「行ってくる! ちょっと待ってて!」

そう言って雛森は走り出した。

俺は、雛森が俺と同じクラスだということを確認すると直ぐにしまった、その紙を取り出す。

俺は雛森に告白しようなんてことは考えたことがない。

してもしなくても、俺にとって、雛森が大事な奴だってことは変わらない。

「くつろさっきくんっおはよう!」

「おー井上。はよー」

高2の始業式。

あたしはいつも通り、黒崎くんに挨拶をした。

あたしは、「おはよう」って言うのが好き。だって、そのときだけは、友達がたくさんいる黒崎くんを、独り占めできるから。

黒崎くんが好き。あたしの、初恋。

黒崎くんはすぐ恋次くんたちに囲まれてしまった。

「おはよ、織姫」

「あ、たつきちゃん。おはよう！」

たつきちゃんはあたしの大好きな、いちばんの親友。

「クラスの紙、みた？　一護も織姫もあたしも、同じクラスだったよ」

「ほんと？　嬉しいなあ」

黒崎くんもたつきちゃんも一緒だなんて。

「結局、去年は告白しなかったんだよね」

「いやー、それは、ほら…ね？」

「もー」。

あ、そういえばね、さっき織姫が一護に言っただのと同じタイミングで『おはよう！』って言ってた女の子がいたんだよ。えっと…ほらあの子あの子。ほんとピッタリだったから驚いちゃったんだけど、あの子、知ってる？」

ねえ、ちょっと気になるよね？

しぎょうしき（後書き）

短くてすみません；

雛森の「日番谷くん」と織姫の「黒崎くん」が似てるなあっていうのを使ったかっただけなんです。笑

ぶろろーぐ 1 (前書き)

ー護Sideです(^o^)/
よろしければぶろろーぐ 2と合わせて読んでください

ぶろろーぐ 1

あれは、去年の終業式。

「なあ、話ってなんだ？」

俺は、この高校で知り合い仲良くなった朽木ルキアに呼び出されてふたりで人気のない静かな昇降口にいた。

俺たちは、黒崎と朽木で、出席番号が前後。

サバサバしているルキアは付き合いやすくて、自然と仲良くなった。そして自然に、俺はルキアが好きになった。

呼び出したルキアの頬がほんのり赤くなっていて、いつもとは違って、いかにも「勇気を出して、言いに来ました」みたいな感じで…。

それで、俺は、ちょっと期待していたんだ。
好きな女子に呼び出されるなんて。

「おい、どーして黙ってんだよ、なんか言えよ」
少しだけいつもよりはよい胸の鼓動をごまかすように、俺は軽く言った。

「…あのー、その、だな…」
ルキアは言い辛そうにモジモジしていた。
そんなルキアに、また強く胸が脈打つ。

「一護は、そのー……。…恋次と、仲がいいだろう？
恋次に…好きな奴がいるとか、聞いたことはないか？」
顔を赤らめて、俺に問うルキア。

「…知らない」

俺は面食らって、焦って、胸にたまっていた息を全部吐き出してから、こたえた。

「好きなタイプとかは？」

「知らない」

…うそだろ？

「好きな芸能人とか、そういうのでもいいんだが……」

…なに思いついてたんだ、俺……。

「知らない」

そうだ…。恋次とルキアは、幼馴染だって、前に恋次から聞いて。

「そうか…」

うつむくルキアを見て、俺の胸はチクツと痛んだ。

それで、あのときも、今みたいに、胸が痛くなったんだ。

身体が震える。喉の奥がかわく。

なにか言おうと思うのに、声が出てこない。

「たぶん、いねえよ」

突然、俺の口から、優しく声が響いて、俺は驚いた。

「恋次が女子も男子も関係ねえって奴なのは、お前もわかってんだろ」

こんなこと、言うつもりねえのに。

「たしかに、そうだが…」

そんな顔してねえで、元気だせよ。そんな表情になる恋なんて、捨てちまえ。

「それに、ルキアは女子だと一番仲いいと思うぜ。

気持ち、伝えてみりゃいいんじゃないの？」

自分は伝えてないのに。

「俺、呼んでくるからよ」

今すぐこの場から、逃げ出したいだけなのに。

「いや、構わん」

ルキアは首を横に振った。

「来年はクラスも別になっちまうかもだろ。最後のチャンスじゃねえか」

そんなルキアに、俺はまだ説得を続ける。

なんで、こんなに必死に、恋次とルキアの仲を応援してるのか、わからなかった。

「いや：実は恋次と私は幼馴染でな。兄様と恋次も面識があつて」
そんなこと、とつくに知ってる。

「そっか」

幼馴染ってだけでも、恋次が羨ましかったのに。

「ああ」

ルキアは吹っ切れたようにサッパリした顔をすると、顔をあげた。

「好きな奴がいると聞いたら、諦めがつくかもしれんと思ったただけなのだ。

やっぱり、兄様に知れたりしても困るしな」

そう言ったルキアは、やっぱり少し寂しそうだった。

「そんな顔するなよ」

そんな顔するなって？ それはお前だろ。

「ありがとな、一護」

……。

ありがとう、か。

ルキアの役にたてたのか、俺は。

それなら、いいのかもしれない。

教室へ戻っていくルキアの小さな背中を見ながら、そんなことを思った。

ぶろろーぐ 2 (前書き)

織姫Sideです(^o^)/

よろしければぶろろーぐ 1と合わせて読んでください

ぶろろーぐ 2

黒崎くんが、好き。

だけど、黒崎くんは、朽木さんが好き。
去年の終業式、あたしは見てしまった。

いつもみたいに「おはようっ」って黒崎くんに挨拶して、
いつもみたいに「おう、おはよ」って黒崎くんに返してもらって、
それで、今日も挨拶できた、笑顔の黒崎くんが見れた、って喜んで
た。

来年クラスが変わっちゃっても、挨拶できるかなって不安はあった
けど、それも黒崎くんの笑顔で吹っ飛んでしまった。

終業式の行われる体育館に移動するとき、黒崎くんがちょっとソワ
ソワしてるのに気付いた。

終業式だから、ちょっと寂しいのかなって思って、あたしと来年も
一緒のクラスがいいって少しでも思ってくれてたりしないかなって
淡い期待を抱いた。

黒崎くんと同じクラスが、今日で終わりにはなりませんよ
うに。

終業式が終わって、教室に戻ってクラスのみんなと寄せ書きしよう
と思っていたら、黒崎くんと朽木さんが教室に戻る階段を上らない

で昇降口の方に行くのがわかった。

朽木さんは、背は小さいのにキリッとしててカッコよくて、大人びてて、大好きな友達。

黒崎くんとも仲がいい朽木さんと一緒なら、黒崎くんと少しおしゃべりできないかな？

そう思つて、近づいたら、黒崎くんの声が聞こえた。

「なあ、話つてなんだ？」

はなし？ 朽木さんが黒崎くんを呼んだのかな。ちよつとふたりの間に行くのが躊躇われて、足を止めた。

「おい、どーして黙つてんだよ、なんか言えよ」

「…あのー、その、だな…」

朽木さんが言い出しにくそうだったから、あたしは思わず壁に身を隠してしまった。

聞いちゃいけない話なのかもしれない。

じゃあ、聞き耳をたてても、いけないんじゃないの？

そう思つたけど、動けなかった。

「一護は、そのー……。…恋次と、仲がいいだろう？」

恋次に…好きな奴がいるとか、聞いたことはないか？」

朽木さんは、恋次くんが好きなのかな。

やつぱり、聞かないほうが良かったかもしれない。

あたしはその場を離れようとした。

「…知らない」

けど、黒崎くんの声がすごく暗くて、心配してしまった。

「好きなタイプとかは？」

「知らない」

「好きな芸能人とか、そういうのもいいんだが……」

「知らない」

質問を繰り返す朽木さんに、黒崎くんは「知らない」と答え続ける。

もしかして、黒崎くんは、朽木さんが好きなの…？

「そうか…」

質問をやめた朽木さんの声も、悲しそうだった。

「たぶん、いねえよ。」

恋次が女子も男子も関係ねえって奴なのは、お前もわかってんだろ」

人のいない昇降口に、優しい、あたしの大好きな、黒崎くんの声が響く。

「たしかに、そうだが…」

「それに、ルキアは女子だと一番仲いいと思うぜ。気持ち、伝えてみりゃいいんじゃないの？

俺、呼んでくるからよ」

黒崎くん、励ましてるの？

黒崎くんの口から出てくる言葉が、ちょっと信じられなくて、あたしは驚いた。

「いや、構わん」

「来年はクラスも別になっちまうかもだろ。最後のチャンスじゃないか」

黒崎くんは告白を勧める。

黒崎くんが、朽木さんを好きなのかも、なんて、勘違いだったんじゃないかな。

「いや…実は恋次と私は幼馴染でな。兄様と恋次も面識があって」
あたしはまた驚いた。

そうだったんだ。たしかに、朽木さんと恋次くんは仲良しだと思っ

てたけど。

「そっか」

「ああ」

「好きな奴がいると聞いたら、諦めがつくかもしれないと思ったただけなのだ。」

「やっぱり、兄様に知れたりしても困るしな」

「それじゃ、たしかに、告白は無理かもしれない。」

でも、黒崎くんが、告白を勧めているのに…。

心の中がモヤモヤする。

「そんな顔するなよ。ありがとな、一護」

「やっぱり、黒崎くんは悲しんでるんだ。」

それを、朽木さんのために、かくして、押し殺して。

やめて。ふたりとも、傷つかないで。

大好きな人たちが、大好きな人たちによって、傷ついていく。
でも…あたしに、できることなんてないんだ。

あたしが、朽木さんだったら。

朽木さんに、なりたい。

黒崎くんを励ましたい。だけど、黒崎くんは、あたしがここにいることを知らない。

朽木さんを励ました黒崎くんに、声をかけたい。

そつと黒崎くんの方を向く。

「黒崎くん！ 教室にいなかったから、探しちゃった。」

「ねえ、教室に行って、寄せ書き書いてくれない？」

「あたし、黒崎くんの言葉が欲しいな。」

あたしには、黒崎くんが、必要なの。

「井上」

黒崎くんは眼を見開きあたしを見る。

「ねっ。みんな、待ってるよ」

あたしはつとめて明るい声を出す。

「うまく、笑えてる？」

黒崎くんは、元気をだしてくれる？

「ああ、そうだな」

黒崎くんが微笑む。

「井上、行こうぜ」

「…うん！」

嬉しい。黒崎くんがまた、笑ってくれた。

階段を上る黒崎くんの隣を少し遅れて付いて行く。

あたしはこんなに近くにいるのに、黒崎くんはあたしを見てない。

朽木さんはここにはいないのに、いま、黒崎くんの心の中にいるのは、朽木さんなんだ。

黒崎くんの横顔を、こんなに近くで見たのは、初めて。

近くにいるほど黒崎くんを想う気持ちは強くなって、強く想うほど黒崎くんを遠く感じて、辛くなる。

そのとき、

「ん？ 元気ないな、井上、どうかしたか？」

ふいに黒崎くんに声をかけられて、瞳に涙がこみ上げてきた。

とっさに欠伸のふりをして、「ね、寝不足かなっ。気にしないで」
って誤魔化した。

「そっか、ならいいんだ。なんかあったら言えよ。友達なんだから」

「…ありがとう」

黒崎くんが、あたしの心配をしてくれたのは、嬉しかった。

けど、こんなに近くで見つめてても、ただの友達なんだ。
そんな事実を痛感した。

ぶろろーぐ 2 (後書き)

織姫好きです、可愛いから。

髪型は真似してますが色はちょっと無理です…。()どーでもいい
そんなわけで、織姫はストーカーじゃないです、はい。
可愛いし健気だからいいんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6187w/>

ぶりーちがくぱろ しょーとしょーと

2011年12月19日16時48分発行